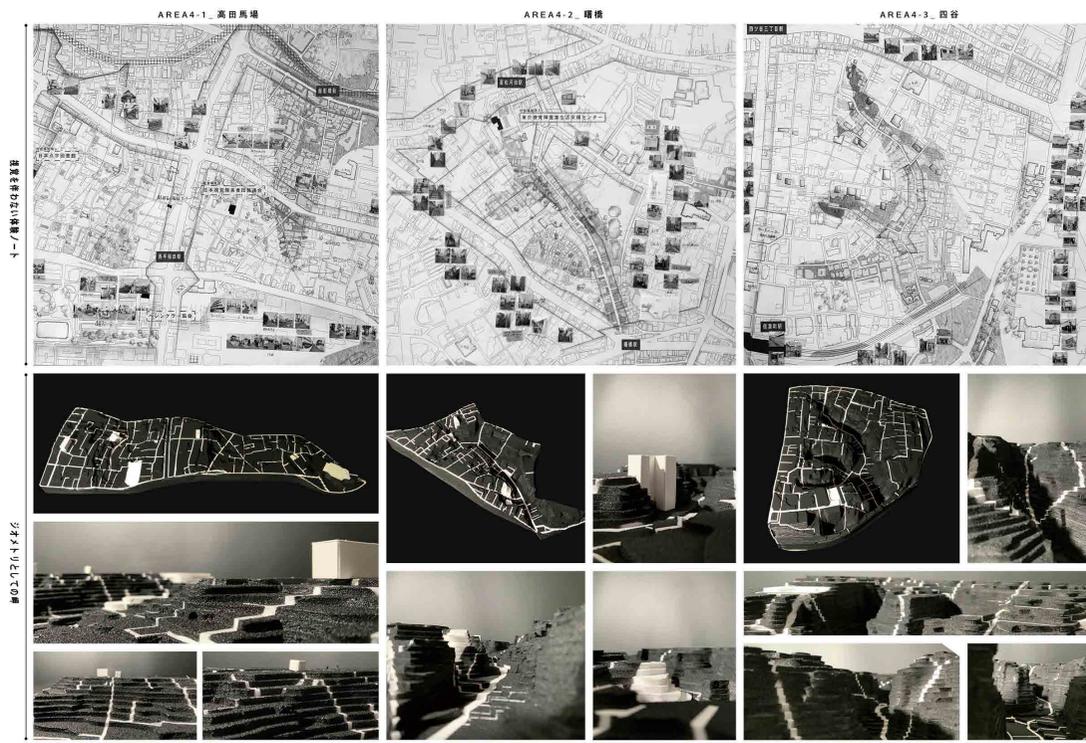




2-8 視覚を伴わない経験まとめ

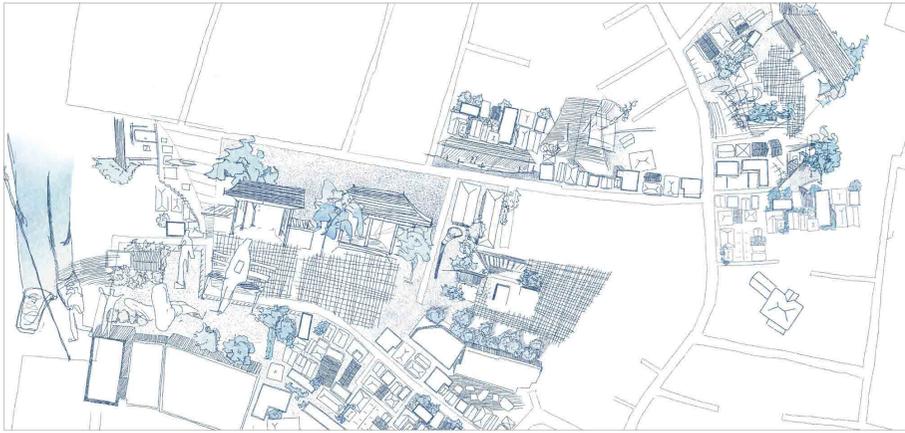
ここでは、特に交通施設が位置している周辺に於ける「動体」や、目には見えない「歩行ログ」を記録している。下の断面図では高エリにて、歩行者がメトリムにわたる歩行経路を歩いていることを想定するのと同時に、歩行者がメトリムで歩いている（公道・歩道）を白線としたものである。この断面は、歩行者が自然歩道のメトリムと、歩行者がメトリムで歩いていることを想定している。



03 視覚を扱わずに空間を捉えるには

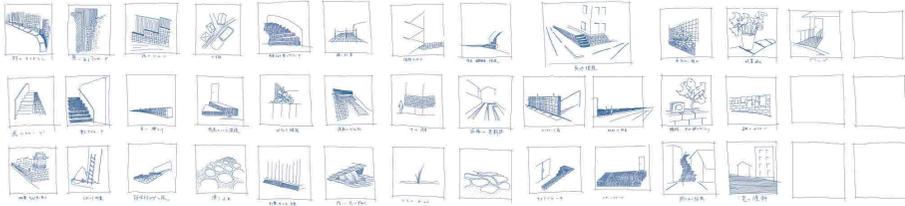
3-1 視覚 4感ベースイメージスケッチ

この章では、視覚障害者に日常生活についてのイメージを通して、視覚を扱わずに空間を把握することを理解するためのイメージスケッチを提案する。視覚以外の感覚を働かせるのが存在を多々イメージとして起こす。そのことを通じて、視覚障害者の身体と空間の相互作用上の関係のイメージを捉える。特にこのイメージスケッチを見るときは視覚が重要な点にある。身体に働きかける空間を捉えるための手がかりは少ないと捉える。



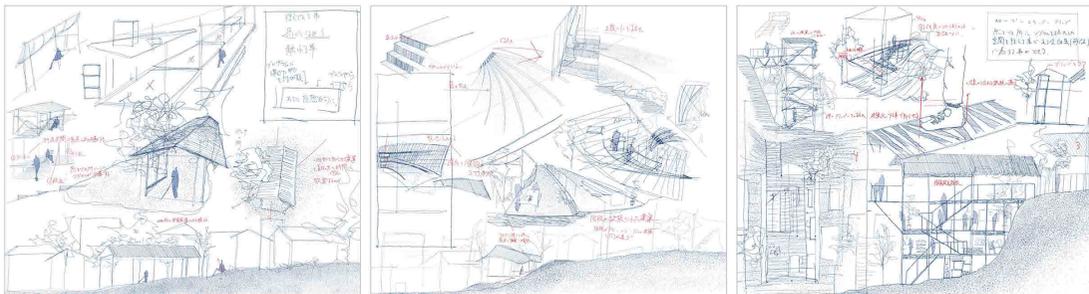
3-2 視覚 壁に立つ・壁を許す構築物

壁に立っているのがゆがんだ構築物をあけていく。視覚障害者が壁を歩く中で自身の存在を把握するための有効なものを探す。視覚者が壁を歩かざるを得ないことで、視覚を扱わずに空間を把握する方法を考える。



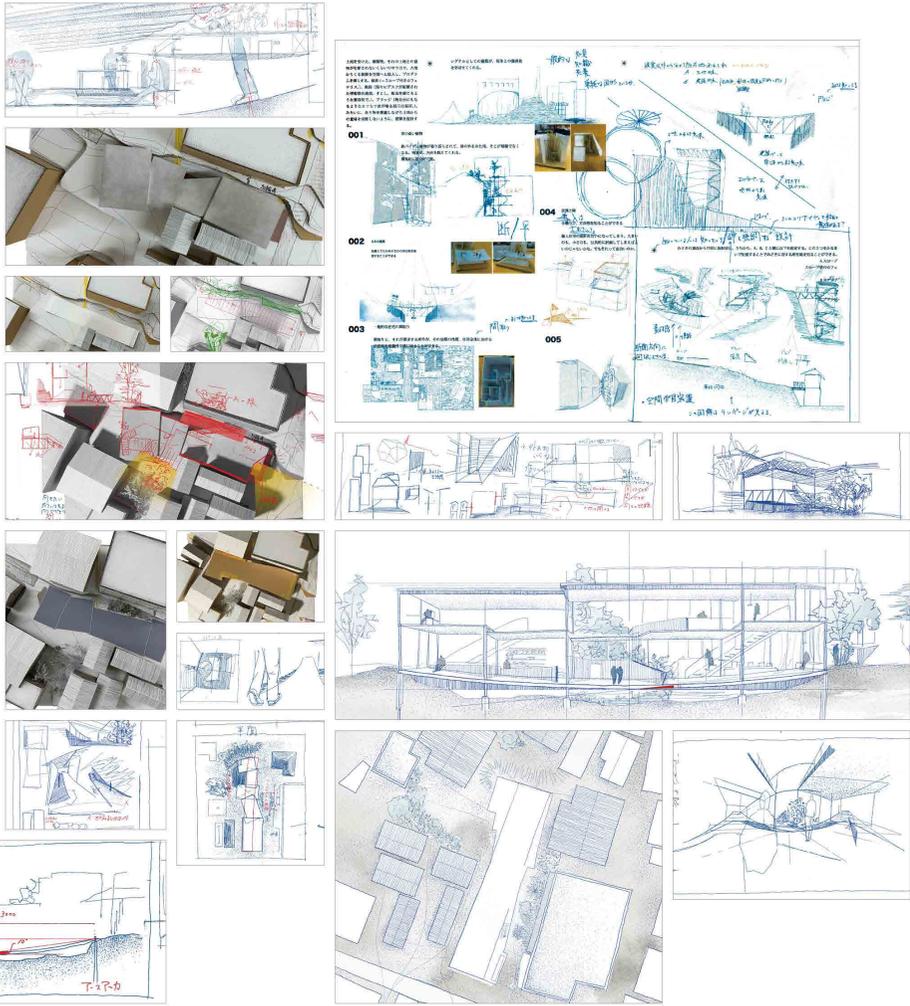
3-3 見えなことから空間を捉える

視覚者は階段を歩かずここで大きな身体の中に入らなければならない。北の方向を捉えることで、社会に所属している意識を育む。一方で視覚障害者は、文字プロンプトの上を歩く時、他者に属する空間に移動、つまり社会生活の中心に立つことされている時は、自身と他の存在とのものという境界のような関係性がある。そこで、視覚障害者も、健全者と同じように、身体感覚を通じてあるものに所属している意識を持つことができる構築物を提案する。ここでは、そのあるものの意味、身体と空間との関係を捉えるものをデザインし、検討を行っている。



3-4 視覚 視覚学

ここでは、重力によって自然に傾いた大きなステップを母体として考える。シグナルは足から感じるその場のフロアの割合である。この傾斜は視覚を働かずに、自身のステップなどの場所にいるのが分かる。この視覚はフロアマップに取って代わる。



3-5 見えな中心

ここでは、建築を構成するあらゆるもの（壁・階段・文字・椅子・テーブル等）が中心にある一点を形成している。そこは建物の中心であり、視覚の中心であり、建築の中心である。

